

④ 白朋苑の動物介在活動（ワンワンクラブ）

■阿部富美子・荒牧健夫・加藤一則

1 はじめに

白朋苑は平成五年五月に開所し、現在に至っています。その間たくさんのボランティアさんに在苑者の生きがい活動に協力していただいています。

例えば横浜商業高校の美容科によるコスメティックセラピー（化粧療法）を、年五回実践しています。毎回十数人の利用者が日常生活とは異なった表情をしていく、言葉もままならぬ耳も遠い百四歳のAさんが、鏡を覗きこんで何とも言えない表情をして職員に疲れを癒してくれる。利用者の本能的な願望に適合した手段を用いると、生きがい活動に効果があると感じさせられました。そんなとき南保健所からの動物介在活動のお話があり、第一回を平成十年六月八日に実践しました。南保健所、獣医師、ボランティア、職員、利用者（二十数人）で始まり、今年で三年目。年四〜五回の実践を利用者は毎回楽しみにされています。現在、参加者も増え、毎回三十〜四十人（通所介護含む）。短期入所生活介護をワンワンクラブの実践日に合わせて入所される在宅の参加者もいます。

2 ねらい

動物との交流は、動物と触れ合うことで、長期記憶をよみがえらせます。利用者の健康を増進させ、生き生きとした生活をし、寝たきりの利用者でもベッドから起きようとする意欲を引き出すと同時に、地域の人達との関わりをつくっていくことにあります。

3 利用者の反応

利用者の中には動物の嫌いな人もいます。最初はどのように参加者を選んでいくか職員間で相談しながら、取りあえず一人一人に聞いて歩きました。その間喜んで笑顔をつくる人、嫌な顔をする人と表情はさまざまでした。今は亡き犬の訓練士だったKさんは、痴呆がありいつも居眠りばかりしていました。が、この時ばかりはしゃきつと、「俺が寝かけてやる」と犬に対して命令していました。「昔飼っていた」と懐かしそうに犬を撫でているTさんは、顔一杯に笑顔をつくってボランティアさんと談笑しています。好みの犬を膝の上に乗せ独り占めしているKさんは、「他にも犬がいるでしょう！もう少し、もう少し」と頬ずりしています。車椅子からリクライニングに移行した猫の大好きなTさんは、体調がかんばしくないと

もかわらず、不自由な手を伸ばし猫を抱き寄せて何か囁いています。

通所介護利用者のAさんは、「動物は大好きなのよ、でも飼えないの」と言いながら犬の首を撫でています。

犬の大好きなNさんは、好みの犬が参加しない回があり、次回参加したとき「この間は休みましたね。今日は来てくれてありがとう」と言って涙を流して感激していました。

短期入所生活介護利用のDさんは、Dさんが投げたボールを犬が飛び上がった口にくわえるのを見てびっくりしたような表情をして喜んでいました。

常に無表情のOさんが、回数を増やすことにより言葉を発し表情が明るくなりました。

痴呆があり以前はすんなりと参加していた利用者の中に、痴呆が進行していくものように参加して動物が近寄ると「私、嫌いなもの」と言って、心理的な変化を見せる人もいます。動物の数が少ない日は、順番がくるまでつまらなそうな表情をしています。側にやって来ると表情が一変し、各自各様に触れ合っ

て動物たちにもファンができます。写真にあるように一人一人の表情は、動物と触れ合うことで、普段日常で見ない生き生きとした表情です。またデイルームで実践し

写真-1 初めて参加のTさん「ちょっと不安そう」



- 1 はじめに
- 2 ねらい
- 3 利用者の反応
- 4 動物介在活動とのかかわりについてーボランティアから
- 5 動物介在活動とのかかわりについてー獣医師から
- 6 結び

ているため「嫌いだ」と言った利用者も、参加者の表情を見ながら遠巻きに見て和んでいきます。

この動物介在活動を通じての利用者の変化は、治療ではないため、会を実践することにより三十分間利用者が動物とのふれあいを楽しみ、生き生きとしていくことであり、地域の皆さんとのコミュニケーションをはかりながら心を和ませているのです。そして次回の動物との出会いをカレンダーに記し、楽しいことを待つウキウキした気持ちにさせることです。実践の日には介助の必要な人は、職員に声をかけ参加したいと要望し、自立度の高い人は自主的に集まって、生活の上で楽しみが生まれたように思います。

4 動物介在活動とのかかわりについて ——ボランティアから

最近、「アニマルセラピー」という言葉がテレビや雑誌等で取り上げられるようになりました。人が犬や猫・その他の動物にふれあうことで多くの効果を生み出す、その癒しのパワーを治療やふれあい活動に利用しているというものです。人と動物のふれあいクラブぬくぬく（以後ぬくぬく）では、AAA活動（動物介在活動）を行っています。

ぬくぬくは、南区保健所のガイダンス（適性審査会）に合格した動物とその飼主、南区獣医師会の先生方がクラブにメンバーとして登録・自主運営されており、現在では約三十五人の会員を数えるほどに成長しています。ぬくぬくの動物たちは、パートナーを組む飼

主のコンパニオン・アニマル（家族の一員）として、ごく普通に暮らしており、けつして特別な動物たちというわけではありません。とはいえ、実際に活動に参加するためには、飼主の指示に従うことが要求されます。さらに、みだりに吠えたりしないこと、みだりに排泄をしないこと、他のボランティア動物に対して騒ぐことなく、人混みや車での移動中も冷静に過ごすことができること等、クリアすべき点も多くありますので、飼主は自分のパートナー動物の性格や個性をしっかりと把握して、普段の生活の中で指示を出す訓練をし、たくさんの愛情をもって育てていくことが大切でしょう。南区保健所のガイダンスでは、健康診断審査と、これら条件の適性審査を行っており、健康・適性を認められた動物たちが、実際に活動を行っています。

ぬくぬくのボランティア活動の原点は、特別養護老人ホーム「白朋苑」での訪問活動で、早いもので今年の四月でまる三年を迎えます。活動開始当初はボランティア・施設の双方ともが手探り状態ではありましたが、毎回活動後に反省会を行って注意点や改善点を確認し合い、互いに努力していくことで、回を重ねるごとに活動内容も充実・安定してまいりました。まる三年になる現在まで、事故もなく楽しく活動を続けてこられたことは、ボランティア個々の努力はもちろん、施設側のご尽力が大きかったと考えております。最近では、顔なじみの参加者も多くなって、みなさんが楽しみに待っていてくれます。その笑顔を見ると、つくづく「来てよかった」「また来よう」というあたたかい気持ちになるよ

うです。その笑顔こそが我々ボランティアメンバーには、何よりの励ましになるのです。そして、共に活動をしている主役である自分のパートナー動物たちに感謝し、いつもよりたくさん誉めてあげるようにしています。

ぬくぬく結成当初、我々は大きく二つの目標を掲げました。一つは「訪問活動を長く続けていく上で、組織づくりをしっかりと充実させていくこと」。二つめは「都市生活の中で、人と動物の良い関係を作り共に暮らしていくために、動物たちの社会的地位を理解してもらおうと同時にその地位を向上させていくこと」です。現在、集合住宅ではペット禁止のところはまだ多く、買物や乗り物に乗る時などにもかなり制限が設けられています。公園でさえ立入禁止のところが増えていく状態の今、飼主側がマナーの徹底と知識の向上にさらに努めていかねばなりません。まだ三十五人ほどの小さなクラブぬくぬくではありますが、ボランティア活動を通して動物とのより良い共存社会をめざして、一歩ずつ歩んでいきたいと考えています。そして老人ホームをはじめとして、小学校のふれあい教室、ゴミを拾いながら愛犬と歩くエチケツト・ウォークなどにも積極的に参加し、地域のマナー向上をめざして活動をしていきます。

ぬくぬくでは、このようなボランティア活動が、南区だけではなく横浜市全体、さらに神奈川県全体に広がっていくことを願って、小さな歩みを全員で続けていきたいと考えております。

写真—3 犬の大好きなTさん



写真—2 毎回参加を楽しみにしているKさん

